

ラジオドラマと「炭鉱」

—リチャード・ヒューズ作『危難という喜劇』(1924)

秋田大学 大西 洋一

演劇が盛んな国として有名なイギリスであるが、この国では目で見える演劇だけではなく、実は耳で聞く演劇も人気を博してきた。リーディング上演なども含めれば耳で聞く演劇の種類も多々あるが、その代表はやはりラジオドラマであろう。ラジオドラマは、たとえば BBC (英国放送協会) の「午後のお芝居 (Afternoon Play)」(「午後の演劇 (Afternoon Drama)」を経て、現在は「ドラマ(Drama)」と改名) という番組などで放送されて人々の耳を楽しませてきた¹。

ラジオドラマの歴史を遡ると、当然数々の舞台演劇を生み出した国ならであり、シェイクスピアの作品をはじめとして様々な戯曲が「朗読劇」として放送されてきた²。しかしながら「朗読」はあくまでも「朗読」であり、活字を音声に変えただけでは原理的には小説を読むのと同じである。そのような状況の中、「耳で聞く演劇 (a listening play)」として、明確にラジオ放送のために制作を依頼され、ラジオというメディアの特質を十分に生かした演出を想定してはじめて製作されたものが、BBC で 1924 年 1 月 15 日に放送された、リチャード・ヒューズ (Richard Hughes, 1900-1976) 作『危難という喜劇 (*A Comedy of Danger*)』(時に『危難 (*Danger*)』) である。この小論では、炭鉱事故という「危難」を舞台としたこの劇の特徴を、同時代の日本での翻案作品(「炭鉱の中」(1925))との比較も行いながら浮き彫りにしていきたい。

*

この作品の注記にあるように「筆者は (1924 年 1 月に) ちょうど映画の脚本が視覚効果のみを考えて書かれているように、音声効果のみの劇脚本を書くよう英国放送協会から依頼を受けた。このようにして、新しいメディアにおける実験作である、最初の「耳で聞く演劇」が生まれたのだ (The Author was asked by the British Broadcasting Company

¹ ちなみに、伝統ある BBC の広報誌の名前は今なお *Radio Times* (1923 年創刊) である。

² 1922 年 10 月 17 日には、エドモン・ロスタン (Edmond Rostand) の戯曲『シラノ・ド・ベルジュラック (*Cyrano de Bergerac*)』(1897) を用いた「ラジオドラマ実験」が放送され、1923 年 2 月 16 日にはシェイクスピアの戯曲(『ジュリアス・シーザー』『ヘンリー八世』『から騒ぎ』)の抜粋が、そして 1923 年 5 月 28 日には『十二夜』全体を簡略化してまとめたラジオ版が放送されたという (Crook 4-6)。

[in January 1924] to write a play for effect by sound only, in the same way that film plays are written for effect by sight only. It is thus the first “Listening-Play,” an experiment in a new medium.)」³。執筆依頼を行ったのは、当時リリック・シアター・ハマースミス (The Lyric Theatre, Hammersmith) のアクター・マネージャーとして活躍したナイジェル・プレイフェア (Nigel Playfair, 1874-1934) である。彼はシェイクスピア劇の現代的な上演のみならず、このラジオドラマの草創期に BBC におけるシェイクスピア作品のラジオ放送に尽力した人物でもある。若干二十三歳の駆け出しの作家であったヒューズは、1924年1月11日にポーマドック・プレイヤーズ (Portmadoc [Porthmadog] Players) という彼が設立に関わったウェールズ北西部のカーナーヴォンシャー (Caernarfonshire) の劇団を連れてリリック・シアター・ハマースミスを訪れていた。そこで、翌週 (1月15日) の二時間の娯楽番組に入れられる作品がもうひとつ欲しい、できれば翻案でなくラジオ用に特別に書き下ろした作品がよい、というプレイフェアの依頼を受けて、一晩でこの作品を書き上げたと言う⁴。

上に述べた制作経緯のために、しばしば「史上初のラジオドラマ」と呼ばれるこの作品の舞台はウェールズの炭鉱である。炭鉱を見学に訪れた (イングランドの) 一組の若い男女 (Jack と Mary) と一人の老人 (Bax) が、突然起こった停電により漆黒の闇の中に取り残されるところからドラマは始まっていく。始めにアナウンサーが、舞台が炭鉱であることを聴取者に告げた後で、以下の有名な冒頭の台詞から「聴覚だけの世界」が繰り広げられるのだ。

[Lights out. An Announcer tells the audience that the scene is a coal-mine.]

MARY. [sharply] Hello! What’s happened?

JACK. The lights have gone out!

MARY. Where are you?

JACK. Here.

[Pause. Steps stumbling.]

³ この作品のテキストとしては、Richard Hughes, *Plays* (Oxford: Chatto and Windus, 1928) をもとに、ラジオドラマ脚本を集めたウェブサイト (<https://emruf.webs.com/british/danger.htm>) に掲載されているものを使用し、必要に応じて拙訳や後述する 1925 年の日本の翻案の訳文を併記する。

⁴ 現在は聞くことができなくなってしまったようだが、この作品の後年の再放送が Internet Archive にあった (URL は末尾の「参考資料」を参照)。その冒頭部分で、リチャード・ヒューズ自身がこの作品の執筆経緯について語っている。

ラジオを「目隠しされたメディア (The Blindfold Medium)」と呼んだ Jean Clothia が指摘しているように、ラジオドラマにおける登場人物の「盲目/目が見えない世界 (blindness)」との結びつきはまさにこの炭鉱の「暗闇」に端を発する (Clothia 248-249)。「必要な『音響』は、爆発音、水の噴出音、足音、そしてツルハシの音。そしてトンネル内の効果を出すためにエコーもなければならぬ」(“The Noises required include an explosion, the rush of water, footsteps, and the sound of a pick. There must be an echo, to give the effect of the tunnel”)との指示書きにあるように、電灯が消えて真っ暗な中で交わされる登場人物間の対話は、スタジオ内で作られた音響効果により臨場感あふれる音の世界の中で展開されていくのである⁵。

機を見るに敏にして、早くも翌年の 1925 年 8 月 13 日には、この作品の忠実な翻案であるラジオドラマ「炭坑の中」が日本で放送されている。大正 14 年 (1925 年) 3 月 22 日に東京放送局 (日本放送協会の前身) がラジオ仮放送を開始して以来、「放送劇」や「ラジオ劇」と呼ばれるドラマが放送されるようになった。ただし、その定義の仕方によって、日本のラジオドラマの始まりには諸説がある⁶。しかしながら、「炭坑の中」が「放送用に書き下ろされた劇脚本による日本での放送劇第一号」(西澤 45)であり、「ラジオが舞台とは質的に異なるメディアであることを明確に意識したラジオドラマ」(吉見 240)として受け入れられたのは間違いないようである。

「炭坑の中」の翻訳・脚本・演出は築地小劇場の創設者である小山内薫が行い、音響効果は和田精、出演者として小野宮吉・山本安英というようにこの劇団のメンバーが加わっており、当時の演劇界の第一線の人々がこのラジオドラマ制作に携わっていたのである (西澤 133-136)⁷。新しいテクノロジーが切り開いたラジオ放送という未知の世界は、洋の東西を問わず才能ある人々を惹きつけていて、東京放送局内には「ラジオドラマ研究会」という組織が作られ、長田幹彦、小山内薫、久保田万太郎、久米正雄らが集い、ラジオドラマの芸術コンテンツとしての可能性を追求したのだ (Hand 14-17, 吉見

⁵ 前注に挙げた Internet Archive の後年の再放送参照。また、ラジオドラマにおける音響のコンヴェンション (約束事) の確立、および言葉と音による自由な舞台世界の創造については、Clothia 250 参照。

⁶ 5 月 10 日の「鞆当」(鶴屋南北作)、6 月 14 日の「不如帰」(徳富蘆花原作)、本放送開始初日の 7 月 12 日の「桐一葉」(坪内逍遙原作)など。西澤 41-60、本間「第一回」、吉見 240 等を参照。

⁷ なお、当時の放送の再現音声を「NHK 名作選 みのがしなつかし ラジオドラマ「炭坑の中」大正 14 年放送」で聞くことができる (URL は末尾の「参考資料」を参照)。番組冒頭で「聴取者の皆さんは、電灯のスイッチを切って、真っ暗にしてお聞きください」と呼びかけてドラマが始まったという。また、「この放送を聞いた久保田万太郎は『ガーンと打ちのめされるような感銘を受けた。そのヴィヴィッドな印象・・・そこにラジオドラマの限りのない将来を感じた』と語ったという。」(吉見 240-241)。

240-242、本間「第二回」)。

さて物語に戻ると、停電の後で炭坑内では爆発音が響き、最初は予期せぬ事態に対して軽口を叩いていたジャックとメアリーも、事の深刻さに気づくようになる。もう一人坑内に取り残されていた見学の老人バックスも二人に加わり、この(ウェールズの)炭坑に対して毒づく。やがて爆発の影響か坑内に水が入ってきて、三人は溺死の恐怖に直面することになる⁸。老いてなお生への執着を捨てがたいバックスと若き二人の間の、生死をめぐる緊張感あふれる言葉の応酬が聞きどころである。死を目前にして信仰篤い炭鉱労働者たちの聖歌の歌声が遠くで聞こえる中、水があごまで届き、いよいよ三人が覚悟を決めようとしている時に救援隊のツルハシの音が聞こえる。すぐに穴が開けられ、メアリー、そしてジャックがロープで助け上げられるのだが、順番を譲ったバックスが間に合わずに流されてしまい、あっけない幕切れとなる。

二十分ほどの短いラジオドラマであるが、その中には「軽佻浮薄さからパニック、諦念、そして安堵 (from levity to panic, resignation and then relief)」へとつながるスリルに満ちた感情の揺れ動きがあり、後のラジオドラマのモデルとなるような聴取者を飽きさせない構成となっている (Clothia 249)。また、老齡 (age) の者こそ人生の何たるかを知っているがゆえに、若者よりも生への執着が捨て難いという切り口も興味深い対話を生んでいる。日本版の「炭坑の中」では、原作脚本をさらに切り詰めているため、上で説明したような炭坑事故の「危難」をどのように切り抜けるかというサスペンスの側面が特に強調されている。しかしながら、そのような単純化のために翻案で省略されたり削除されたりした部分にこそ、作者が原作に込めた思いが見受けられるため、ここでは二点ほど興味深い点を指摘しておきたい。

まず一つは、ウェールズという土地およびそこで働く炭鉱労働者に対する作者リチャード・ヒューズの思いである。ウィリアム・ゴールディングの『蠅の王』に通ずる傑作海洋小説として名高い『ジャマイカの烈風 (A High Wind in Jamaica)』(1929年)で名を馳せたヒューズはサリー州の生まれだが、実は祖先がウェールズ出身であり、The Welsh National Theatre の副会長を長く務め、ウェールズを代表する詩人ディラン・トマス (Dylan Thomas, 1914-1953) と親交もあり、晩年にはウェールズ北西部のグウィネズ (Gwynedd) に居を構えるなど、ウェールズとは切っても切り離せない関係がある (“Mining the Seams”)。そのウェールズに対し、ヒューズはバックスを使って紋切り型の悪罵を吐かせる。

⁸ 炭鉱事故というと落盤を想像する人も多いと思うが、何らかの事故により坑内に流入する地下水は死を招く大きな脅威である。たとえば、1979年のサッチャー首相誕生直前の時期のウェールズの炭坑を舞台とした現代演劇であるクリス・アーチ (Chris Urch) 作『我らが父祖の地 (Land of Our Fathers)』(2014)を参照。

BAX. Goodness knows! I'd expect anything of a country like Wales! They've got a climate like the flood and a language like the Tower of Babel, and then they go and lure us into the bowels of the earth and turn the lights off! Wretched, incompetent - their houses are full of cockroaches-- Ugh!

「分かるものか。ほんとに、こんな土地つてありやしない。雨はざあざあ降り通しだし、詞（ことば）はまるで分かりやあしない。その上、人をこんな穴ん中へおびき入れて、いきなりあかりを消してしまふなんて。[以下の台詞は省略されている]」（ヒウズ 4）

翻案では、確かに冒頭のト書きで舞台が「エエルス」（ヒウズ 1）であると記しているとはいえ、辺鄙な田舎の地の炭坑にわざわざ来てしまったのが忌々しい限りだと後悔しているように聞こえるが、原作では明確にウェールズという特定の地域への悪口雑言である。しかし坑内に水が流れ込む音が聞こえる中、炭鉱労働者が歌う賛美歌の声が聞こえてくると、バックスは一転彼らに対して敬意を示す。

MARY. Why, listen! that must be them! [Voices heard singing: "Ar hyd y Nos."] That must be the others. They can't be very far off. Let's call to them.

BAX. Sound carries a long way in a tunnel. But listen. [More singing.] Gad! those chaps have courage.

JACK. You're finding some good in the Welsh, then, after all?

[The roar of water gets louder.]

MARY. The echo's getting louder! - Oh, Jack, it isn't an echo! It's water! The mine's flooding! We'll be drowned!

[The voices sing a couple of lines of "Aberystwyth."]

BAX. I wish I had the faith of those chaps, sir. It'd make dying easy.

MARY. Oh, Jack, I don't want to die yet! I won't, I won't, I won't!

「あいつらは勇気がある」と呟くバックスに対し、「して見ると、この土地の人間もばかには出来ませんか」と彼が先ほどまではウェールズを悪しざまに罵っていたことをジャックは皮肉っぽく思い起こさせる。「あいつらのやうな信仰があればなあ。さうすれば樂に死ねるんだが」（ヒウズ 9）と、“Ar hyd y Nos” [=All Through the Night] や“Aberystwyth” (“Jesus, Lover of My Soul”につけられる曲) という聖歌の歌声を坑内に響かせる炭鉱労働者たちの信仰心の篤さをバックスは大いに羨み、「おれ達だつて讚美歌

は唱はないまでも、せめて紳士らしくしようぢやないか（If you and me don't feel like singing hymns, we can at least behave like gentlemen）」（ヒューズ 10）と彼らのリスペクタビリティ（respectability）を賞賛している⁹。この賛辞もまたウェールズの労働者階級に対する紋切り型の表象ではあるが、ヒューズのウェールズの人々に対する思いが垣間見られるところである。

そして、死後の魂の行く末に関わる部分など小山内薫訳では省略されている部分はあるが、ここでもう一つ指摘しておきたいのは「仕事」とは何かに関わる台詞が出てくる部分である。水がどんどん迫る中でジャックは、汽車が来るのに荷物を忘れた、でも取りに帰る時間はないと軽口を叩くのだが、それはすなわち、この世への心残りとしての「仕事」を示唆しているのだ。

JACK. It's all right, Bax, I'm not going off my nut. I mean what I say. What do you think I've got to live for, besides myself and Mary? Why, my work! If it wasn't for that, Bax, I'd go to death without caring a tuppenny damn! I'd die just for the fun of the thing, to see what it felt like.

BAX. [sarcastically] I shouldn't worry about that if I was you: the world'll get on all right without you, never you fear! And what is your work?

JACK. I write. Poetry.

BAX. Good God! and you call that work!

自分が何のために生きているのかを考えた時に、自分自身とメアリー、そして「私の仕事」があるとジャックは叫ぶ。仕事のことになれば死んでも構わないとまで言うのだが、ボックスにお前の仕事は何だと問われ、「私は物書き。詩を書くんだ」とジャックは答える。ボックスは「何と、それを仕事というのか！」と呆れている。この箇所は「炭坑の中」ではそっくり削除されてしまっているが、サスペンスを重視したラジオドラマということであれば仕方がないところであろう¹⁰。もちろん、この劇は炭鉱労働を中心に据えた労働者演劇ではないわけだが、炭鉱という危険と隣り合わせの厳しい「労働」の世界の中に男性主要登場人物を置き、彼に「詩作」が我が仕事と高らかに宣言させているところに、これから文学や演劇の世界での活躍を希求する駆け出しの若手作家の強い自負心のようなものが感じられる箇所となっている。

⁹ ちなみにこの賛美歌は、ウェールズの男声合唱隊がスタジオの防音ドアの向こうから歌い、ドアを開け閉めしながら漏れ聞こえるようにしたという（Lawson-Peebles 592）。

¹⁰ 実際、脚注 4 で挙げたイギリスでの再放送でもこの箇所は省略されている。

リチャード・ヒューズ作『危難という喜劇』は、いわゆる「ラジオドラマ」の第一作ということで歴史に名を残した作品であるが、イギリスの炭鉱を扱った演劇の歴史の中においてもまた興味深い一ページである。

参考資料

- Chothia, Jean. “10. The Blindfold Medium: Early Radio Drama.” *English Drama of the Early Modern Period 1890-1940*. London: Longman, 1996.
- Crook, Tim. *Radio Drama: Theory and Practice*. London: Routledge, 1999.
- Hand, Richard J., and Mary Traynor. *The Radio Drama Handbook: Audio Drama in Context and Practice*. New York: Bloomsbury Academic, 2011.
- Hughes, Richard. *A High Wind in Jamaica*. 1929. Oxford: Chatto & Windus, 1962.
- . *Plays*. Oxford: Chatto and Windus, 1928.
- Lawson-Peebles, Robert. “The Beggar’s Legacy: Playing with Music and Drama, 1920-2003.” *The Oxford Handbook of the British Musical*. Eds. Robert Gordon and Olaf Jubin. New York: Oxford UP, 2019. 585-611.
- Urch, Chris. *Land of Our Fathers*. London: Bloomsbury, 2014.
- 西澤實『ラジオドラマの黄金時代』（河出書房新社、2002年）
- 吉見俊哉『「声」の資本主義 電話・ラジオ・蓄音機の社会史』（講談社、1995）
- リチャード・ヒューズ／チエホフ 著（小山内薫 訳）『炭坑の中 犬』（ラジオドラマ叢書 第4篇）（春陽堂、大正14年）
- リチャード・ヒューズ（小野寺健 訳）『ジャマイカの烈風』（晶文社、2003年）

*

- 本間理絵「春陽堂とラジオドラマ [全4回] 第一回 娯楽としてのドラマ」
[\(https://www.shunyodo.co.jp/blog/2018/09/radio-drama_1/\)](https://www.shunyodo.co.jp/blog/2018/09/radio-drama_1/)
- 「春陽堂とラジオドラマ [全4回] 第二回 春陽堂とラジオドラマ研究会」
[\(https://www.shunyodo.co.jp/blog/2018/09/radio-drama_2/\)](https://www.shunyodo.co.jp/blog/2018/09/radio-drama_2/)
- 「NHK 名作選 みのがしなつかし ラジオドラマ「炭坑の中」大正14年放送」
[\(https://www2.nhk.or.jp/archives/tv60bin/detail/index.cgi?das_id=D0009060004_00000\)](https://www2.nhk.or.jp/archives/tv60bin/detail/index.cgi?das_id=D0009060004_00000)
- “Mining the Seams of Radio History—Richard Hughes and *A Comedy of Danger*”
<https://www.thestage.co.uk/features/2005/mining-the-seams-of-radio-history-richard-hughes-and-a-comedy-of-danger/>
- “*A Comedy of Danger*” https://archive.org/download/DwightEisenhower1952/BBC_-_worlds_

first_radio_drama_danger_-recreation.mp3（最終アクセス 2020 年 1 月 23 日、ページ表示なし）

* 本研究は JSPS 科研費 JP19K00440 の助成を受けた、平成 31 年度基盤研究（C）（一般）「現代英国演劇における北イングランドと炭坑労働者の表象に関する研究」の成果の一部である。